

## 青少年異文化体験プログラム（サクセス '05）報告

### 中学生・アメリカ・ホームステイの記録

菊地英昭（当会理事）

#### はじめに

寒川町並びに寒川町教育委員会のご後援を賜り、多くの寒川町民のご協賛を頂戴しながら、昨年に引き続き、アメリカの、ステイト・カレッジ(State College)という小さな町での、短期ホームステイ・プログラムを予定通り実施し、8日間の日程を終えて4月2日無事帰国することができました。「寒川青少年異文化交流プログラム '05」（サクセス）実施に当たっては、とりわけ、寒川町教育委員会の英語指導教師、ポール、エイサー両先生をはじめ、町内3中学校の校長先生ならびに英語科担当の先生方の暖かい励ましとご指導・ご鞭撻、さらにサクセス実行委員会の指沢委員長をはじめ当協会の理事の皆様による強力なご支援があつてはじめて実り豊かなプログラムを成就できたことをまず報告させていただきます。

さて、当プログラムを実施するにあたり、当初から現地ステイト・カレッジ（ペンシルベニア州）での受け入れ体制、とりわけホストファミリーの募集とオリエンテーション、滞在中のスケジュール調整など一手に引き受けていただきましたコラ・リーさん（以前、寒川で8年間英語を指導されたジョナサン・フィリップさんのお母さん）、及びジョナサン&マリ夫妻には、今回もまた本当にお世話になりました。フィリップ家の皆さんのおかげで、私たちは5日間のステイト・カレッジ市でのホームステイを、一層中身の濃い、充実した形でエンジョイする事が出来ました。ここで改めて、暖かく私たちを受け入れてくださったステイト・カレッジの皆さんに心からお礼申し上げたいと思います。

#### 1、ステイトカレッジ—理想的な教育環境を誇る、落ち着いた学園都市—

当市は、ペンシルベニア州立大学を擁する典型的な学園都市であり、住民の多くは学生や教授スタッフなど大学関係者で占められ、静かな落ち着いた郊外に位置しています。ゴルフ・コースが二つもあるという、広大な大学キャンパスに先ず驚かされます。学生たちの運営する「生協」で、農学部の農園で絞った牛乳から作ったアイスクリームをおなかいっぱい食べたり、キャンパス・グッズのショッピングを楽しんだり、子どもたちにはとても魅力的な町と映ったようです。

空港に到着するや、ジョナサンとフィリップ家の人々、ホストファミリーの家族の一団が、大きな歓迎の幕を掲げてのお迎えでした。今年の1月、寒川を訪問しホームステイされたW&J（ワシントン・ジェファーソン大学）のミラー教授※と女子学生が握手を求めて来られ、再開を喜び合いました。ハイウェイを3時間余りかけてステイト・カレッジに今朝到着したとのこと。みんなで記念写真を撮り、空港から各自の車に分乗して「歓迎会」会場に向かいました。そこは、教会関係者の地域集会場で静かな住宅地の一角にあり、

そのホールには既に立食用のテーブルと手作りのご馳走が並んでいました。ホストファミリーは子どもを中心とした家族ずれで、寒川の子どもたちも思い思いに料理を戴きながら言葉の壁を越えてたちまち親しくなったようです。

ステイト・カレッジ市（正式には **Borough of State College**）の市役所に市長さんを訪ねたのは 3 日目の月曜日でした。寒川町長からのメッセージを読みあげ、箱根細工のお土産を差し上げ喜ばれました。次に議会を案内され、一人の女性議員（人口約 4 万人の町ですが議員は全部で 6 人）が議会制度について分かりやすく説明され、素晴らしい社会勉強になったようです。市長は行政の執行責任者ですが、給料はわずか 8500 ドル（年俸）で、議員は全くの無報酬という徹底したボランティア精神に感銘しました。

※ミラー氏はW&J大学の教授で、青年心理学（犯罪学）の国際的な権威です。今年 1 月、ミラー教授ら 30 数名が寒川に来られた時、W&J 大学と東京理科大学の間で、伊藤総助教授を中心に学生交流プロジェクトの話し合いが進み、その打ち合わせもあってミラー教授がわざわざステイト・カレッジまで尋ねて来られました。

## 2、「アーミッシュ村」の学校訪問

「昨年と違ったコースを！」というわれわれの要望から、今回はフィリッピ家のご提案を戴いて、ステイト・カレッジから車で 2 時間近く走ったなだらかな丘陵地帯に位置する「アーミッシュ村」のユニークな小学校（第 1 - 8 学年）を見学し、アーミッシュの子どもたちと半日たっぷり交流するという機会に恵まれました。地元のアメリカ人でも自由に入れない閉鎖的なコミュニティで、写真撮影は禁じられました。おそらく、本邦初めてのアーミッシュ学校訪問といえるでしょう。

アーミッシュというのはアメリカ建国の時代、ヨーロッパを追われて新大陸に移住したスイスのキリスト教再洗礼派と呼ばれる人たちで、ペンシルベニア州を中心に、カナダ、オハイオなど 14、5 万人が北米の地に点在しているといわれます。純粋な信仰に根ざした独自の文化を守り、ドイツ語系の独特の言語を保持し、今尚、悠々と自分たちのライフスタイルを頑固に守っているところに、不思議な魅力を感じさせられました。彼らは、①電氣を使用しない「ロウソク」の生活、②自動車を使わず「馬車」（バギー）③各自農園を持ち自給自足の静かな、平和な生活を信条とする宗教的に純粋で敬虔な人たちです。子どもたちは独特の服装で登校し、礼儀正しく、「聖書」「賛美歌」を独特のドイツ語で読み、一つの教室で 1 年生から 8 年生までの複式学級というこれまた実にユニークな学校でした。寒川の中学生諸君も強烈なカルチャーショックを受けたようで、反省会でも話題の中心になりました。詳細は中学生たちのコメントに譲りたいと思います。

## 3、典型的な郊外の公立中学校

月曜日に訪問した、パーク・フォーレスト中学校では、英語以外の外国語を母国語とする

異文化圏の子どもを対象とした特別指導クラスに招かれ、東京出身のステイト・カレッジ在住 2 年の三田貴裕君という中学 2 年生の日本人が主に通訳としてわれわれを案内してくれました。州の法律に従って、このクラスには他にタイ、韓国などのアジア諸国出身の子どもたちなど 10 人近く在籍し、英語による特別指導を受けているのです。二人の担当の先生は、われわれのために綿密の教材を用意され、最後までお世話いただきました。

素晴らしいカフェテリアでのランチを挟んで、午前午後には渡って校内の各クラスでの授業を参観し、積極的に授業に参加する機会に恵まれました。どのクラスも非常にオープンで、笑顔で気持ちよく迎え、語りかけてくれるところに、「アメリカらしさ」を感じました。図書室や教室での普通の授業、さらに音楽の作曲などにも、コンピューターが導入されており、IT 教育に力が入っているなーと感心させられました。寒川の中学生諸君も、この視察を通して、二つの対照的な学校を参観し、改めてさまざまな人種、民族、宗教、文化のサラダボールといわれるアメリカの「多様性」を如実に感じたと思います。

#### 4. それぞれのホームステイ

アメリカ人の家庭に数日間家族の一員として受け入れてもらい、実際に共に生活して各人が「異文化」を感得するというのが私たちのホームステイ・プログラムの趣旨です。3 月 29 日の日曜日は、朝起きて朝食をいただき、夜、床につくまでそれぞれの家庭（ホストファミリー）に任されました。ドライブに一家で市内あちこちに連れて行ってもらった人、近所の子どもの呼んでホームパーティーをしてもらった人、朝、教会に家族揃って連れて行ってもらった人、とそれぞれの家庭の日曜日を楽しんだようです。

29 日の日曜日はイースター・サンディー（春分の日以降の、最初の満月の次の日曜日）。イースター（復活祭）はわれわれ日本人には馴染みが無いのですがキリスト教の国々では大切な宗教行事です。商店街のショーウィンドウには、チョコレートで作った卵、ウサギ、羊に亀、魚などのグッズがきれいに並びます。ジョナサンの家では、この日息子の玲くんを中心に、W&J の学生やフィリッピ家の家族と共に「エッグハント」というイースターの行事で盛り上がりました。色とりどりの卵が 10 数個用意され、一人がそれらを家中のどこかにさりげなく隠して、それらを他の参加者みんなで見つけるというゲームです。勿論戸外でも楽しめるゲームで、イースター・サンディーの年中行事だそうです。

さて、私のホストファミリーは、ご主人が竹細工職人の家庭で、70 を過ぎた老夫婦二人が静かに生活しているお宅でした。日曜日は近くに住む息子さんが会いに着て、いっしょに食事をしました。私の希望でスーパーマーケットにみんなでショッピングに行きました。日本のそれと大差は無いのですが、巨大なドーム型の広いスペースに、大量の商品が並べられ、改めて「アメリカ」を実感。食品売り場などでは、カウンター付きのレストラン風食堂が付属しており、そこで買った料理で食事もあるシステムは面白いと思いました。

#### 5、 首都ワシントン D. C. を探検する！！

5日間のステイト・カレッジ滞在を終えて、飛行機は一路ワシントンD. C. のダレス空港へ。日本で言えば国会議事堂や官邸、官庁が立ち並ぶ「霞ヶ関」に当たるアメリカの首都で、ホワイトハウス、連邦議会、合衆国連邦政府の諸官庁や巨大な公園、博物館、美術館などが集結するアメリカの玄関、それがワシントン D.C. です。宿はダウンタウンからポトマック川を渡った対岸のジョージタウン・スイート・ホテル。ここは私立の名門ジョージタウン大学の近くにあり、落ち着いた大学町です。

事前研修であらかじめD. C. の訪ねたいところを各自調査しており、途中道に迷ったりしつつもかなり計画的に視察できたようです。ちょうどポトマック川河畔の桜祭の時期でしたが、残念ながら桜はまだ蕾は堅く、町中に咲いていたのは木蓮の花で、とりわけホワイトハウス前の公園のそれは実に見事で、この時期ちょうど満開でした。

スミソニアン博物館群は、一日ではとても廻りきれぬほどの各種博物館、資料館、美術館などが立ち並ぶ広大なスペースで、私たちは美術館、自然史博物館、航空宇宙博物館の三つのグループに分かれて見学しました。外からさっと見学した主な建物としては、リンカーン記念堂、ワシントン記念塔、国会議事堂、国立美術館などです。食事には最適とステイト・カレッジの議員さんに推薦されたところが国立国会図書館のレストラン。歩き疲れてお腹がすいていたためか子どもたちには大好評でした。あとは参加した子どもたちのコメントをご参照下さい。

## 結びにかえて

昨年に続く2度目のステイト・カレッジのホームステイということで、訪問する側のみならず受け入れてくださるフィリッピ家の方々も、昨年の経験を生かして用意周到に準備され、その点でより充実したアメリカ体験となったと思います。

とりわけ、私のホストファミリーのベックウィズ夫妻との話から、フィリッピ家のマリさんやコラ・リーさんの献身的な受け入れ準備の様子がありました。ウェルカム・パーティー、サヨナラ・パーティーをわざわざ催してくださり、心づくしの料理を各自用意するよう配慮し、手作りでデザインしたTシャツやバッグ、ステイト・カレッジを紹介するパンフレットや地図まで、心こもったお土産をみなさんで用意されました。実は、フィリッピさんたちは、今度の受け入れのための詳細なマニュアルまで作成し、協力家族に配布し、準備されていたのです。4ページのパンフレットに、我々の名簿やスケジュール、ホームステイでの心構えや日本人とアメリカ人との生活様式の違いなど細かに書かれていました。私たちの今後の活動の指針となるように思われます

一方、私たちも、今回は特に事前研修を重視し、指沢実行委員長の企画の下に、ポール、エイサ両先生、及び当会理事の徳永先生（大学英語講師）にお願いしてオリジナルの英語テキストを用意し、英会話レッスンを数回催しました。英語によるコミュニケーション力向上の成果が現れたのか、ホストファミリーからは「積極的で、とても明るい子どもたちであった」という高い評価をいただきました。この初めての異文化体験を通して、彼らの今後の学習意欲、広い豊かなモノの見方や考え方を育てる一助になれば幸いです。この経験を生かし、これからも寒川に来られる外国人を温かく迎え、交流していきたいと願っております。